

令和3年(2021年)の幕開けにあたり、1月2日、斑鳩の地に歴史を刻む世界遺産・法隆寺を家族とともに訪問した。正月にもかかわらず人影まばらな境内を歩きながら、疫病の退散を祈り、法隆寺の悠久の歴史に思いを馳せる。現存する世界最古の木造建造物として知られる西院伽藍は、飛鳥時代に建立された金堂と五重塔が左右に並び、何度訪れても圧倒的な存在感にため息が出る。意匠を凝らした木製部材が複雑に組み合った建物の軒先には、蓮華文を飾る軒瓦が美しく連なり、全体が調和して、独特の雰囲気醸し出している。金堂や塔に用いられた「法隆寺式軒丸瓦」は、蓮弁が二枚一組になった「複弁蓮華文」の外側に鋸歯文が巡るのが特徴で、7世紀後半以降に各地に普及する。



写真 法隆寺の再建伽藍を飾った軒丸瓦 (天理参考館)

このような金堂の建築を眺め、基壇の石壇を登って堂内に足を進めると、柔らかいLED照明が、安置された仏像の数々と壁面の仏教絵画(模写)を厳かに浮かび上がらせている。金堂の堂内にLED照明が設置されたのは平成20年(2008年)のこと。昭和24年(1949年)1月26日、火災による壁画の焼損事件以降、長きにわたって照明がなく、それまでは、自然の光を頼りに、薄暗い堂内を眺めるしかなかったのだ。この火災事件が、昭和25年(1950年)、文化財保護法が制定される契機となったことも、法隆寺の長い歴史の一コマとして重要だ。焼損した金堂壁画は、激しく損傷を受けたにもかかわらず重要文化財に指定され、収蔵庫で現状のまま保存されて現在に至っている。

思い出されるのは、文化財保護法制定の70周年を記念して、昨年の2020年3月13日(金)～5月10日(日)、東京国立博物館で開催予定だった特別展『法隆寺金堂壁画と百済観音』が、政府による緊急事態宣言の発出によって、やむなく開催中止となってしまったことだ。展示室には、国宝・百済観音像や焼損前に模写された壁画などが運び込まれて、展示作業が終了し、開幕を待つばかりの状況だった。23年ぶりに東京で公開されるはずだった百済観音像も、見学者の目に触れることなく、特別展のために新調されたガラスケースとともに法隆寺に戻り、今は、いつものとおり、法隆寺の名宝を安置する大宝蔵院で公開され、何事も無かったかのように、平然とした笑みを浮かべている。

さて、壁面の模写絵画に囲まれた金堂内陣の須弥壇は、「東の間」「中の間」「西の間」の三つに分かれ、それぞれ、薬師如来

像、釈迦三尊像、阿弥陀三尊像の本尊が安置されている。薬師如来像の光背裏面には90字の銘文があり、病を得た用明天皇が平癒を念じて寺と薬師像を造ることを発願したが、叶わないまま崩じてしまい、推古天皇15年(607年)、天皇と聖徳太子(厩戸皇子=うまやどのみこ)が遺詔を実現したと伝えている。この銘文が創建の由緒を伝える斑鳩寺は、『日本書紀』によれば、天智天皇9年(670年)、落雷のため、「一屋余す事無く焼失した」とされている。この時に焼失した斑鳩寺は、昭和14年(1939年)に西院伽藍の南東で発掘された若草伽藍跡で、現在の西院伽藍は、奈良時代の初頭までに飛鳥時代の様式で復興されたものと見るのが定説だ。飛鳥時代に遡る仏教寺院は、ほとんどが考古学的な遺跡と化しているのだが、伽藍や堂内の内陣、仏像が旧状を保ったまま護り継がれてきたのは、奇跡に近い。

一方、釈迦三尊像の光背銘196字が伝える造仏の由来は次のようだ。推古天皇29年(621年)、聖徳太子の生母・穴穂部間人皇女が崩じたのに続き、翌年(622年)正月に聖徳太子とその妃・膳夫人が病に伏し、三宝に従い、親族が聖徳太子と等身の釈迦像を造ることを発願するが、2月になり、太子と夫人が相次いで亡くなってしまふ。そこで、推古天皇31年(623年)、釈迦三尊像を仏師の鞍作止利くらつくりのとりに造らせた。この銘文によれば、聖徳太子の没年は推古天皇30年(622年)だが、『日本書紀』には、推古天皇29年(621年)の春2月5日、夜半に厩戸皇子が斑鳩宮で崩じたとあり、1年のずれがある。『日本書紀』に従うならば、今年、令和3年(2021年)は聖徳太子の没後1400年ということになる。

これを記念した特別展「聖徳太子と法隆寺」が、奈良国立博物館(4月27日～6月20日)、東京国立博物館(7月13日～9月5日)を会場として開催される予定になっている。開設された公式サイトによると、法隆寺で護り伝えられてきた寺宝の数々を通して、太子その人と太子信仰の世界に迫る構成になっている。注目されるのは、法隆寺の各堂内に安置されている本尊や秘仏などが展示室に出陳され、普段とは違った環境でじっくりと観察する機会が与えられることだ。本稿で触れた金堂の「東の間」本尊の薬師如来像は、これまで門外不出だったが、奈良と東京の両会場に出陳されるとのことで、堂内では見ることのできない光背銘も展示室では観察することができるかもしれない。金堂内陣の後方に安置される多聞天・広目天像は、日本最古の四天王像だが、いつもは近づいて見ることができない。また、東院伽藍夢殿むろのぞうの行信僧都座像は奈良時代の肖像彫刻の傑作だが、普段は、本尊・救世観音像の左脇の厨子内に安置されている。聖霊院の本尊の聖徳太子像は、太子の500年忌にあたり、平安後期に造立された秘仏だが、今回は特別に展示室で公開されるという。一方、国宝・伝橋夫人念持仏厨子や国宝・玉虫厨子、夢違観音など、大宝蔵院の宝物類も出陳されるが、普段から展示ケースに収まっているとはいえ、やはり人気を集めることだろう。

法隆寺の金堂壁画に焦点を当てた今年の特別展は残念ながら中止となってしまったが、聖徳太子の1400年遠忌を記念した今年の特別展が無事に開催されることを祈るばかりである。